

タイトル	資料紹介 前川正の短歌 - 「生命に刻まれし愛のかたみ」未収録歌を中心に
著者	田中，綾；一色，紗矢香；池田，和利；TANAKA, Aya；ISSHIKI, Sayaka；IKEDA, Kazuto
引用	北海学園大学人文論集(75)：114（一）-86（二九）
発行日	2023-08-31

資料紹介 前川正の短歌

——『生命に刻まれし愛のかたみ』未収録歌を中心に

田 中 綾・一 色 紗矢香・池 田 和 利

キーワード…三浦綾子、前川正、短歌、『道ありき』、『羊蹄』、『アララギ』、『旭川アララギ』、土屋文明、単行本未収録

前川正（ただし一九二〇～一九五四年）の名は、三浦綾子の自伝的小説『道ありき（青春編）』（主婦の友社、一九六九年）や、三浦（堀田）綾子との往復書簡を中心とした『いのち生命に刻まれし愛のかたみ』（講談社、一九七三年）で知られている。三浦綾子より二歳上の幼なじみであり、闘病中の綾子に短歌創作と聖書を読むことを教え、励まし続けた人物でもあった。北大医学部在学中から短歌を作りはじめ、全国的な歌誌「アララギ」を中心に発表し

ていたが、肺結核に罹り、一九五四年五月に死去。享年は三十三であった。

前川正の短歌は、『道ありき（青春編）』に十六首収録^①されており、初出「アララギ」誌との異同については、田中綾「三浦綾子『道ありき（青春編）』の引用歌——小説における短歌引用という戦略」^{②③}で検証した。本稿では、そこで課題として挙げた「アララギ」以外の歌誌での初出を可能な限り調査した。その結果、『生命に刻まれし愛のかたみ』巻末にまとめられた「前川正歌集」（全二七三首）に未収録の短歌百十首を発見することができた。

まず、前川正が寄稿した「アララギ」以外の歌誌につ

いて短く述べておきたい。

「羊蹄」は、「アララギ」の北海道内会員の地方機関誌として、一九四六年九月から一九四九年十月号まで刊行された。樋口賢治が中心となり、編集発行人は小森汎、発行所は、当初は「札幌市南十三条西十二丁目 樋口賢治方」であったが、三卷九・十月号（一九四八年十月）から「札幌市南一条西三丁目富貴堂内札幌講談社方」に移った。会員は道内外に約三百名いたが、樋口の東京転住を機に廃刊となった。のちの「北海道アララギ」刊行につながる歌誌の一つでもある。

「旭川アララギ会々報」（一、二号）、「旭川アララギ会報」（三〜十七号）、「旭川アララギ月報」（十八〜四十二号）は、前川正を編集者とする「アララギ」の地方誌であった。発行所や発行人の記載は号によって違いが見られたが、「旭川アララギ月報」の発行所は、「旭川市一区番外地 細谷弘治方」（第二十四号・一九五二年一月からは「旭川市春光町一区番外地」であった。また、前川正が手術・入院後の第三十七号（一九五三年八月十六日）から、編集者は武田信義に変更になり、一九五四年二月

(二)

で終刊に至った。これらについては、上出恵子による綿密な調査「旭川アララギ会々報」における三浦（堀田）綾子の短歌その他」に詳しい⁽⁵⁾。

以下、発表年順に短歌資料を紹介していくが、歌番号は便宜上のものである。☆★は同一歌と思われるため、時期の早い「☆」にのみ歌番号を付した。また、歌番号の上の「＊」は、『生命に刻まれし愛のかたみ』に収録されていない、単行本未収録歌百六首である。

なお、「羊蹄」「アララギ」誌における漢字の旧字体は、ワープロソフトで変換し得るもののみ反映させた。ゲラ刷りの「旭川アララギ会々報」「旭川アララギ会報」「旭川アララギ月報」は、ほぼ新字体であるため、特別に旧字体を使用したと認められたもののみ反映させた。

「アララギ」一九四六年七月号 七月集 其三

1・煤煙に黒ずむ春の雪の上投げ捨てられし蟹の甲赤し

「羊蹄」創刊号（一九四六年九月）九月集 其一

2・濁流の引きしなだらの砂の跡川原に立ちて厭かず眺

めき

3・笹原の騒立ちみゆる春の風は廣き野面に渡り初めし
らし

4・黄昏れし廊下をゆけば生理學研究室の前に猫の鳴聲
きこゆ

「羊蹄」一卷十一号（一九四六年十一月）短歌作品 其二

5・白樺の葉がきらめきて搖るる時枝に吊るされたワイ
シャツひかる

6・講義室の窓明け放たれて若葉風すがしき中にノート
す吾は

7・薄緑にきらめく柔葉白樺の樹下に蒲公英の呆け飛び
立つ

「羊蹄」一卷十二号（一九四六年十二月）短歌作品 其二

8・局所をば放射狀に取巻いて止血鉗子の色の冷たし

9・腹膜を切れば薄黄の大腸のうねりゆくみゆオーメン
トム・マールユスも見ゆ

「羊蹄」一卷十二号（一九四六年十二月）歌會報「羊蹄」
創刊記念歌會作品

* 10・公孫樹葉の吹き溜りたる鋪裝路に遅れし妻をG・I
は待ちゐる

「羊蹄」二卷一月特別号（一九四七年一月）短歌作品 其

二

11・二里あまり冷き水をのぼり來て日蔭の澤に吾山女魚
釣る

12・發電機ダイナモの唸り轟く發電所の二階に友と酒を酌みてを
り

13・鐵骨と得子がいしは朝の露に濡れ四基の大變厭器の低き唸
りは聞ゆ

「羊蹄」二卷三号（一九四七年三月）短歌作品 其三

14・雪の降る暗きまひるの街角に酸素熔接の青き閃き

15・鈴の音の靜かなる馬は氷柱の青く透きしを櫓に曳き
ゆく

16・病む床に一人仰向き爪切れば冴えたる音の響くこの

朝

「羊蹄」二巻六号（一九四七年六月） 短歌作品 其二

17・夕されば熱のこもらふたゆき身を言ひつつアスピリ
ン錠劑を噛む

18・羊蹄の誤植多きに省みれば校正手傳にゆかず久しき

* 19・障子明るき部屋に静臥しつつ蠅一つゆるく飛ぶを眺
めをり

「羊蹄」二巻七・八号（一九四七年八月） 短歌作品 其二

20・汗あえて登りて來れば水ありて水のほとりの木賊

瑞々し

* 21・公孫樹葉の吹溜りたる舗装路を踏みしだきつつジ

ブゆく朝

22・山羊に曳摺られ小走になりて少年は傾斜の下の草萌

に立つ

23・血沈値の大きかりしにこだはりて眩しき街を黙して
歸る

(四)

「羊蹄」二巻九・十号（一九四七年十月） 短歌作品 其二

24・虫喰ひし蔭の廣葉の生ひ茂り日射豊けき山峽の道

25・クリスチャン片山首相の事にもふれ基督教青年會の
相談終へぬ

26・ラヂオ・チャーチの時間となりて暫は静臥の儘に聖
書を開く

27・食慾もなく夕は疲れたり自ら腕にビタミンを打
つ

「羊蹄」二巻十一号（一九四七年十一月） 短歌作品 其二

28・羊蹄とは植物にしてぎしぎしの異名なることを圖鑑

にて知りぬ

29・刺繡せる大きバッグを手を持ちて純白の靴の輕き足

どり

植村環女史

30・黒きローブに純白のネック・レース飾りて一人講壇

に立つ見ゆ

31・はすにかぶりし帽子の下の瞳は澄み靜なる聲で語り
出づるも

32・花甕にあやめの尖葉ゆらぎつつ祈らむとして眼つむ
る環先生

33・會衆の彼方に豊かな頬は見え時々澄める讃美歌の間
こゆ

「羊蹄」三卷十二号（一九四七年十二月）短歌作品 其二

34・公園の木立の路を女學生輕々と自轉車を踏みて來り
ぬ

35・落葉の路歩み踏ふ少女あり白足袋の色の清しかる
かな

「アララギ」一九四七年十二月号 十二月集 其三

36・公園の木立の中を並びゆくに何か戀人の如き錯覺

37・このまま抱擁せば如何ならむなどと想ひつつ暗き道
を處女と並びゆく

「羊蹄」三卷一月特別号（一九四八年一月）短歌作品 其

二

38・酔ひて踊る人等と離れて若き少女ら圓く坐り聖書讀

み讃美歌を唱ふ

39・柏葉一片と散る高臺に司會の處女の祈の聲は透
る

40・風通る二階の窓の凭り立ちてリルケの詩をば二三頁
讀む

41・臂の乾きにて醒めし眞夜にして試験電波の放送のこ
ゑ

「羊蹄」三卷二号（一九四八年二月）短歌作品 其一

42・轉々と職をかへゆく君は今宵小學校卒業の學歴をい
ふ

43・花甕の素枯れし菊の前にして牧師は吾等に箴言を説
く

「羊蹄」三卷三号（一九四八年三月）短歌作品 其二

*44・マンホールの下流れゆく水の音霧深き朝を出でて來
れば

45・父に語る母の言葉の平凡なるに焦々として今宵早く
床に入る

46・保存せし芳蘭支那料理菜單一部又しても談インフレに及ぶ

47・白々と構内照明塔に光あり引込線貨車群の屋根に積む雪

「アララギ」一九四八年三月号 三月集 其三

48・意識的に一線を引きて處女に對するも永病む吾の小さき倫理

「羊蹄」三卷四号（一九四八年四月）短歌作品 其二

49・ルーテルの宗教改革研究を處女説く時に硬きドイツ語の發音

50・ストーブの火勢衰へ来る頃漸く終へぬ圖書分類カード二萬枚の整理

51・零下三十度の今日も單調に昏れゆけば六疊の間に淡し蠟燭送電

52・師範生宗教への關心を嘲笑し虚無^{ニヒル}を言ひて煙草をふかす

「羊蹄」三卷五・六号（一九四八年六月）短歌作品 其二

53・未だ尙萌ゆるものなき枯野原舊練兵場に荒く吹く風
54・戀愛と結婚特輯號の雑誌をば眼鏡を取りて父讀み始め

55・殺されしガンヂーにふれ不可能と思はれむ主義を貫けといふ

「アララギ」一九四八年六月号 六月集 其三

56・さざめきて来る處女の一團此所にもまた亂れ來し日本の語法

「アララギ」一九四八年七月号 七月集 其二

57・つづまりは主體性といふ語に逃避する君も僕も雑誌よりの知識にて

「羊蹄」三卷七・八号（一九四八年八月）短歌作品 其二

58・雪解の水は音たて流れつつ裏街の家の軒に鳴く鳩
59・俄雨上がりし鋪道輝きて金魚の鉢を並べ置く店

60・冷々とコンクリートに水を打ちし藥局に入り氷嚢を

購ふ

61・祈禱するひそけさにゐて頭上より梢隠れに鋭き鳥の
聲

「アララギ」一九四八年八月号 八月集 其二

62・性明^{さが}るき君が黙して従ふは吾が感情に氣づきし故か

「アララギ」一九四八年九月号 九月集 其二

63・粉炭の中にまじりし松の葉が静臥始めし部屋にかを
りぬ

「羊蹄」三卷九・十号（一九四八年十月）短歌作品 其二

* 64・電壓の低くなりたるラヂオをば諦めつ今宵も早く寝

ねむよ

65・基督者^{クリスチャン}には戀愛は罪惡かとの反撥^{はんぱく}が牧師の説教より
萌し來りぬ

66・扁桃腺の熱に臥れる數日に葱の喰ひたき幾朝もあり

67・性慾の處理のことなど躊^{ちゅう}らはず問ふ君に異なる世代
を感ず

「アララギ」一九四八年十月号 十月集 其二

68・英文タイプ修得が吾が望みにて月謝の工面が今月も
出來ぬ

「アララギ」一九四八年十一月号 其二 土屋文明選

* 69・肩抱き媚びるが如く私語^{さしご}くを傍らにして清し我等は

「羊蹄」三卷十二号（一九四八年十二月）短歌作品 其二

70・首突出し媚びる笑みにてマイクに向ふ女黨員は物慣
れし口調に

* 71・木洩陽も射さぬ樹蔭の芝草にひそひそとして語らふ
二人

72・鮮かに隈を取りたる唇は敬語などを言へば皮肉にゆ
がむ

73・水垢の浮きたる池の枯れ蓮秋の空氣の冷々として

74・雨にぬれ夜の鋪道は輝やきぬ林檎屋の店洋裁店

「アララギ」一九四八年十二月号 其二 土屋文明選

75・收獲の濟みし畑に残りたる紫蘇の實も今朝は土に散

りたり

「羊蹄」四卷一・二号（一九四九年二月）短歌作品 其二

76・サンダルを素足に穿ける少女ゐて草生しづかに夕かげり来る

77・秋の陽の淡く照らせる切株田緬羊が二頭草喰みてゐる

78・鶏小屋に鶏交尾するさまを見て昂りもなく静臥にはいる

79・愛情の手紙も何かわづらはし蟋蟀の聲澄みて起りぬ

80・唇を得しと思ひしたまゆらに息荒々と眼覺めけるはや

81・緬羊が草喰む横を通り過ぎ尙奥深き林檎園をゆく

82・灌漑溝の澄みたる水につきのほり林檎園への小道濕れるに入る

「アララギ」一九四九年二月号 其二 土屋文明選

83・踏みゆけば靴に抵抗感が柔しやはらかクロバーに霜結ぶ
凍土の道

(八)

84・意氣地なく距離を保ちて交はれば處女は次々と吾を離れゆく

「アララギ」一九四九年四月号 其一 土屋文明選

85・若きが萌す不安におびえつつ教授等の入黨を傳へ來りぬ

「アララギ」一九四九年五月号 其二 土屋文明選

86・今度こそは迎合クリスチャンでゐたくなし外電は原子戦争の悲惨を傳ふ

87・平和をば唯祈るより術なきか組織なく氣力なきクリスチャン我等

「羊蹄」四卷五・六号（一九四九年六月）短歌作品 其二

88・打ちつくる如き言葉を交す聞く女を交へし學生の一群

89・眞夜中を熱こもり來て眠れねば上の垂訓を吾は讀むなり

90・明方に起りし咳に苦しみつ治まれば淡き淡きくれな

の空

91・たはやすく君の肩に手を置く奴も居て思はず吾の昂りとなる

92・戦争を鼓吹せざりし消極を今となり孤高者と自誇するグループ

「アララギ」一九四九年六月号 其二 土屋文明選

93・平和とは永劫の希望かと思ふ時風見矢が方向を轉じたり

94・地下に潜る覺悟つかねば入黨をすすむる君に吾は無言なり

「アララギ」一九四九年八月号 其二 土屋文明選

95・サングラス掛けて晝間の街に出づ永病めばアカシアの芽吹きにも感傷しつつ

96・教會のプチブル性を肯へば或時は僕も思ふクリスチヤン・コミユニストの可能性を

「アララギ」一九四九年九月号 其二 土屋文明選

97・暴力を否定する我等クリスチヤン勞組で常に反動と呼ばれて

「羊蹄」四卷九・十号（一九四九年十月）短歌作品 其二

98・麥の秀に光集る岡の道永病むことを嘆きてくだる

99・唐黍の瘦せたるが立つ畑の道試歩する君に従ひてゆく

100・酔ひてゐる君を抱へて歸る時人氣なき鋪道を猫横切りゆく

101・黨に入り一つ理論を單純に信ずる君既に異なる世界

102・外電の短き記事に怖れつつ或る結論を抽き出さむとす

103・中國に擴りてゆく革命か心沁む大學生の加はること

104・夕暮の堤に咳けば立留る川から霧は絶えず昇るかな

105・ゆるくゆるく風速計が廻りゐつ病める孤獨をば君嘆くとき

106・豚肉が煮立ち生姜が香に立つ夜この安らぎに頼らむとする

107・銀紙をむきてチーズを口に入れそのまま朝の静臥に入る

108・娶ることなくて病みつつ果つるべしまた雹の降る季節となりつ

「アララギ」一九四九年十月号 其二 土屋文明選

109・カーテンのなびかふ白く塗りし家永病む身をば嘆き來つれば

「旭川アララギ会々報」第一号(奥付なし、一九四九年十月か)

110・日本にレヂスタンスの無かりしを悔しと會へば今日も嘆かふ

* 111・ガス管の埋設工事土を掘る裸身汗せるは鮮人ならず

* 112・クリスチヤンの日和見主義を反動といふ五十嵐久弥の太き聲吾に向く

* 113・トラツクがクラツチを切り替へて重々と眼下の坂昇りゆく

114・伸び枯れし蕨の立てる丘に居て或るかなしみに吾は

耐へをり

* 115・墓石群曇の丘に鎮まれば吾がかなしみをさまる如

し

* 116・萩の花も既に終りと嘆き言ひ春光台の丘のぼりゆく

* 117・赤土が蜒々とつづく丘の道轍のあとの水しろじろし

* 118・蜻蛉が轍の跡の水の上群りとべり翅音ならしつ

119・この胸の空虚さは何の故ならむ枯枝が踏み折れて音立つるとき

「旭川アララギ会々報」(奥付では「旭川アララギ会誌」)
第二号(一九四九年十一月二十日)

120・夜更けて「きけわだつみのこえ」を読む母なりみれば泪ぐみろつ

121・枯草に雨が細く流れをり踏みなづむ君を伴ひ上る

122・細き雨降れる世界を外として廢墟の壁に身をば寄せ合ふ

* 123・時雨ゆくひとときの間を廢墟にて枯葉集めて焚火する君

* 124・白々と雨が外面を吹きてゆく窓に立ちいつか君泪ぐ

む

*125・無影燈灯れる下の台上に胸廊整形手術始らむとす

126・止血鉗子みるみる数を増してゆき今メスは第四肋骨をさぐる

127・鈍き音たてて截られし肋骨が透明な感じにて取出だされつ

「旭川アララギ会報」第三号（一九四九年十二月十八日）

*128・君の声受話器に聴きて吾は去る別離の時と自ら決めて

*129・受話器より洩れ来し君の声想ひつつ雪ふきしきる街歩みゆく

*130・君に告げず去りゆくことをおのずから悲しむ如し雪降る街に

*131・雪の吹く街を面伏せ歩みゆく君との別離一人悲しみつつ

*132・吹雪く街処女が面を伏せてゆく別離の電話掛けて出でし時

133・トーストをココアにひたしたべてゐる君なりあはれ

病みつづけ居て

*134・愛咬といふ文字に昂奮を覚えしはいつの年からかいまだ吾は童貞にて

*135・ヴァンデ・ヴェルデ讀みたることを君言ひきその君が今初恋に失敗してゐる

*136・キリストに君を連れむと伴へば既に噂姦ましきクリスチヤンの世界ぞ

*137・なべては過ぎゆきとなりにけり泪しつつ君日記を燃やす

「アララギ」一九四九年十二月号 其二 土屋文明選

*138・啄木鳥きつぎが今しも音を立つる丘我がかたはらに汝はやすらふ

139・この胸の空虚さは何の故ならむ枯枝が踏み折れて音をたてつつ

「旭川アララギ会報」第四号（一九五〇年一月二十八日）

*140・自らを道化どうけの如く虐げて振舞ふ君その寂びしさを今宵は洩らす

141・Passive Resistance といふことを秘かな據点とし我等生くべし

*142・かたみに一つ言葉に傷きて別れたりき眼醒むれば今朝は雲降り居て

143・没り陽してみるみる昏くなれる丘啄木鳥が頭上の枝移りゆく

144・安靜の日々を守る君へ書いてやるポルトガルの尼僧の悲しき恋文のこと

145・電燈を消せば顕ちくる汝が言葉「あたしが死んだら解剖にしてほしい」

146・靄こめて星天頂に瞬けば友らのクリスマス・カロルの歌声が近づいてくる

*147・クリスマス・トリートに明く灯が入れば処女らは唱ひ出づ讚美歌一〇五番

*148・右の胸かすかに鳴りて醒めし夜半「主の祈り」をば称へてもみる

*149・夜半醒めて寝ねられぬまま口の中に「インマヌエル・アーメン」と繰返へしあつ

「アララギ」一九五〇年一月号 其二 土屋文明選

150・異性間の友情は信じないと母は言ふ夜遅く歸りし吾が錠おろす時

「旭川アララギ会報」第五号(一九五〇年三月二十日)

*151・君等との思想的断層を肯へど不安懷疑なき吾にもあらず

*152・君等には平穩に育ちし世代と見えるらし孤独なる実存なんて贅沢だ

*153・つきつめればそれも君等の自負にして一様に戦争の傷痕を言ふ

☆154・喘鳴の断えざる右胸を上にしていつしか吾は睡りゐしかな

☆155・窓硝子吹雪に鳴れる夜なりけり寂びしき今は汝に逢ひたし

*156・白き呼吸吐きつつ夕べを歩みゆく汝が病むといふを聞くは悲しも

*157・ザラメ雪靴に重たき街の中疲れつつ寂びしきに尚歩みゆく

* 158・凍道に靴を滑らせ独り歩む今夜は思切り疲れてみたし

159・汝をしたふ我が恋愛歌をば面白くなしと常に言ふ坂

本先生と金田君

* 160・吾が作る恋愛歌をば処女等読み揣摩臆測をなしをるらしも

「アララギ」一九五〇年五月号 其二 土屋文明選

☆ 161・葡萄酒を一口飲んでまたいぬる午後の静臥は脚ちぢめつつ

「旭川アララギ会報」第六号（一九五〇年七月十日）

* 162・旅に出たき願ひを持つも儚き注射器が煮え立つる音ひそかなり

★・葡萄酒を一口吞みて又寝ぬる午後の静臥は足ちぢめつつ

* 163・寝返りて氷枕がまた鳴ればいつに癒えゆく吾かと思ふ

「アララギ」一九五〇年七月号 其二 土屋文明選

164・平和をば希ふといふも虚しきか新聞社特報ビラに吾も寄りゆく

「旭川アララギ会報」第七号（一九五〇年八月二十日）

* 165・愛するとは何のことならむ一人丘に来て問へば郭公のこゑ

* 166・君を置きて来りしを悔ゆるにもあらず丘の上郭公の声しきりなり

* 167・臨時ニユース終りしあとに君の云ふ“Freedom for the thought that we hate is lost.”

168・自が意志なくて流されゆくさまも彼の日の如しさびしけれども

「アララギ」一九五〇年八月号 其二 土屋文明選

169・レインコート這ひゐる蟻を拂ひ立つ丘降れば又忙しき日常があり

「旭川アララギ会報」第八号（一九五〇年九月十日）

170・赫土に蛇がねむれる丘の上汗垂りて自転車をなほも
押しゆく

* 171・紫に葡萄の花の咲ける丘戦ひのなき平和なる世にあ
らねども

172・桜の芽の輝く丘を今は去る彼方に牛の群うつりつつ

* 173・医療国営の彼の国のこと想ひつつ控へ室の鏡に向き
てネクタイ結ぶ

「アララギ」一九五〇年九月号 其二 土屋文明選

174・郊外のリラ薫る道歩めれば「この儘で倅せなの」と
不意に汝言ふ

「旭川アララギ会報」第九号（一九五〇年十月八日）

175・吾が思惟を破るものなき丘の上時折に団栗が落つる
のみにて

☆ 176・夢の花咲きたる清き水あればペダルをゆるめ吾の寄
りゆく

177・白き鼻毛一本あるを苦心して切りたるあとはまた静
臥せむ

「アララギ」一九五〇年十月号 其二 土屋文明選

178・蚬の飛ぶ草に埋れし路のぼる淋しくなれば丘に來る
なり

「旭川アララギ会報」第十号（一九五〇年十一月十二日）

179・揚羽蝶汝の頭を去らず舞ふ草高く夕暮れて來し丘の
上

180・運ばれしラーメンを喰う汝なるが口すばめ幼き箸の
持ちやうなすよ

* 181・隣室に行きたる汝を気づかへばながくなぐ鼻汁^{はな}を
かむ音

* 182・渡りゆく歩道の銚がきらめけり雑踏の中も寂びしき
ものか

* 183・肝臓を百匁買ひたる荷をさげて霜柱融くる街帰り行
く

「アララギ」一九五〇年十一月号 其二 土屋文明選

184・常よりは頬紅をつけて來しといふがポプラ青葉に映
えて弱々し

185・蝶多き草叢に伏してゐたりしが訴へ來たる汝が眼蒼し

「旭川アララギ会報」第十一号（一九五〇年十二月三日）

186・おもむろに世論作られてゆくさまを傍看し批判し爲すこともなし

* 187・排気管白く蒸気を噴ける角曲りて雪に眞向ひて行く

* 188・植字する君の机のかたはらに坐りしのみに吾はやすらく

189・「旭川アララギ会報」刷り上りインクのにほふ夜の吾が部屋

「アララギ」一九五〇年十二月号 其二 土屋文明選

★・菱の花咲きたる清き水あればペタルをゆるめ吾の寄りゆく

「旭川アララギ会報」第十二号（一九五一年一月三十一日）

☆ 190・マスクの紐ゆつくりかけて立上る出で行く今朝は零下二十六度なり

191・干割れたる汝が唇を眼離さず見詰めてをりし脈計るとき

192・言論が抑圧されゆく過程さへなまなまとして彼の日の如し

193・黨員と見做さることもおそろしく我等にタブーとなりし平和といふ語

* 194・大君をたたふる賀歌を作る茂吉先生これだけではどうしても好きになれぬ

「アララギ」一九五一年一月号 其二 土屋文明選

195・オーロラの如くに雲に色あれば没り陽の丘に來しを喜ぶ

「旭川アララギ会報」第十三号（一九五一年二月十一日）

196・凍らぬよう蜜柑をベッドにぬくめ置き夜半の渴ける時に喰ふなり

* 197・九度の熱降らず十日経にければ氣弱くなりて醒むる夜半あり

「アララギ」一九五一年二月号 其二 土屋文明選

198・疲れしとふ汝を試歩路に抱へつつ停止せる風力計の輝きを見る

「旭川アララギ会報」第十四号（一九五一年三月十一日）

* 199・謄写インクに汚れし手をば洗はむと凍りたる洗面器に湯を注ぎをり

* 200・甘酒が沸きこぼれ急に匂ひ立つたゆけくも萌しくる熱に堪へてをりしに

* 201・氷枕のあたるあたりが痺るれどそのままの姿勢をつづく他人の如く

☆ 202・ネクタイを結びなほして呉る時近々と二重瞼が匂ふが如し

* 203・痣の如く腕に残りし傷の痕たはやすく冷凍植皮にたのみたりしが

204・単純に平和を希がふ吾等をば「こまめの歯ざしりさ」と冷笑しをるとぞ

「アララギ」一九五一年三月号 其二 土屋文明選

(一六)

205・排氣管豊かに蒸氣噴ける角曲りて雪に眞向ひて行く

「アララギ」一九五一年四月号 其二 土屋文明選

★・窓硝子吹雪に鳴れる夜なりけり寂しき今は汝に逢ひたし

★・喘鳴の斷えざる右胸を上にしていっしか吾は睡りぬしかな

「旭川アララギ会報」第十五号（一九五一年五月二十日）

206・共に病む吾らの試歩路ひっそりと測候所立つところを廻る

* 207・編輯の相談終へて帰りゆきし松枝君細谷君バーをあらいて愉快なりきと便り呉る

* 208・酒吞まねば君らより幾らかは煙たがられ早々として去る細谷君松枝君

* 209・濕布薬仄にほふ汝のベツト言葉少なく三十分を見守りて去る

* 210・歩行禁止を医師命ずれば彼の丘の草萌えむ今も行き見えれず

※佐野先生送別歌会 一九五一・三・一一 高坂綾子宅
（十八頁に掲載）

* 211・寝切りの床なれば脚がだるしだるし折つてみたりあ
ぐらの姿勢をとつたりしても

* 212・バイを取り活字植ゑゆき口重く答ふる君を見ればた
のしも

「旭川アララギ会報」第十六号（一九五一年五月二十七日）

* 213・原子砲既に実用の域に在りとラヂオ明るきことの如
く報じ終へぬ

214・ささやかな平和懇談会に繋がるを危険なことと牧師
さんは云ふ

215・再軍備反対を云ひて通じ合ふ二三の友の中に病み居
り

* 216・再軍備反対を云ふ吾に向かひ「病人の現実遊離さ」
と去りゆく一人

217・サントニン黄視のままに臥て居れば熱崩す午后のは
かなし

「アララギ」一九五一年五月号 其一 土屋文明選

★・マスクの紐ゆつくりかけて立上る出で行く今朝は零
下二十六度なり

218・共に病む吾らの試歩路ひつそりと測候所立つところ
に終る

「旭川アララギ会報」第十七号（一九五一年六月十七日）

* 219・土屋先生秋には東京に転居さるるらしアララギの隅
に小さき報あり

220・昼の蚊が電球の囲りを飛ぶみつつ熱なき午后の安静
つつく

* 221・受話器より洩れくる細谷君の声輪転機唸れる中に途
切れて聞ゆ

* 222・「キリスト者平和の会」の会則に病人は半額月十円と
あるもあはれなること

* 223・組織なきクリスチャン我等と嘆きしは一昨年今は
「キリスト者平和会」に頼めり

「アララギ」一九五一年六月号 其二 土屋文明選

★・ネクタイを結び直して呉るる時近々と二重瞼が匂ふが如し

「旭川アララギ月報」第十八号（一九五一年七月十五日）

224・新しく下げし網目カーテン揺れ居れば見慣れし空も変化あり今朝は

* 225・沃丁に爪を黄色く汚しし儘微熱ある汝は睡りて居たり

☆ 226・すかんぽにすがりつきゐし青ばったしづかに莖をのほり始めぬ

「アララギ」一九五一年七月号 其二 土屋文明選

227・エキホスが仄に匂ふ汝がベッド言葉なく三十分を見守りて去る

「旭川アララギ月報」第十九号（一九五一年八月十九日）

228・義足鳴らしペタル踏みゆく一人あり易々と銀行の角を曲りてゆきぬ

* 229・スタンドが青く灯れる業務局片隅に電話のダイヤル

の澄める音あり

* 230・部屋隅にかたまり蕎麥をすすする細谷君とタイプスト等部屋大方は消されて

* 231・硝子扉の向ふは明るき印刷部^{なつば}某服の工員五六人動ける見えて

* 232・ステロ鑄造機より次々と取出されし鉛板は白々として電灯の下

* 233・水噴ける冷却器に次々と鉛板は入れられてかすかに湯気を立つる愛しも

* 234・輪転機始動十五分前しづかなる印刷室に空気流るる

* 235・高速度輪転機勤々と立てるかげ油差し終へて工員去りぬ

「アララギ」一九五一年八月号 其二 土屋文明選

236・我は羽を押へ弟は鶏の頸を切り父は窓から一部始終を見物し居る

「アララギ」一九五一年九月号 其二 土屋文明選

237・沃丁のしみたる爪も目に立ちて微熱ある汝は睡り居

りたり

「旭川アララギ会報」第二十号（一九五一年九月十六日）

* 238・しめじ茸かほれる朝の味噌汁のこの平安に頼れる我

か

239・永病みてかたみに愛す苦しさを蟋蟀の声の途絶えし
夜半にも思ふ

* 240・既に特審局あり治安省設置も確實といふ噂なべて彼の
頃と同じ経過にて

* 241・自転車に病みゐる汝を運びゆく交番が見えれば仲通
りに曲りなどして

* 242・水したたる砂碕押し上ぐる排土機が川原の中に■き
合はす

「旭川アララギ月報」第二十一号（一九五一年十月二十一

日）

☆ 243・乳鉢に葉磨りゐる澄める音静臥のままに聴きてをり
たり

244・下駄箱を改造し岩波文庫つめてある君の屋根裏部屋

に上り来りつ

* 245・党員のT君I君ら逮捕されしといふ噂共に結核に苦
しみし頃の友にて

246・改築の成りたる我等の教会堂今宵は二階まで灯れる
が見ゆ

「アララギ」一九五一年十月号 其二 土屋文明選

247・赤クロバー揺れゐる丘に郭公かつこう鳴く此狀を病みゐる
汝に如何にか告げむ

★・すかんぽにすがりつきゐし青ばつた静かに莖をのぼ
り始めぬ

「旭川アララギ月報」第二十二号（一九五一年十一月十八

日）

248・灌漑溝乏しき水の光る側女ゐてひつそりと鉄屑拾ふ

249・丘に来て病みゐる汝を想ふ時何の樹か断間なく黄金こがね
に光る葉を降らせつつ

「アララギ」一九五一年十一月号 其二 土屋文明選

250・永病める汝との逢ひの歸る途縁の中に天文臺圓屋根^ド輝^ムく

251・笛の如く鳴り居る胸に汝を抱けば吾が淋しさの極まりにけり

「旭川アララギ月報」第二十三号(一九五一年十二月十六日)

252・されざれと煉瓦の堆を置ける原永病める汝をばおきて此所に来つれば

* 253・共産党或は岩波フアンと罵らる単純にクリスチヤンとして平和願ふに

* 254・又してもどこからか看視されてゐる感じなり我等平和を説かなくなりぬ

* 255・キリストの時代にも言論抑圧の事実ありや「人黙さば石叫ぶべし」の聖句あり

「アララギ」一九五一年十二月号 其二 土屋文明選

★・乳鉢に藥磨りゐる澄める音靜臥のままに聴きて居りたり

256・改築の成りたる我等の教會堂今宵は明々と二階まで灯る

「旭川アララギ月報」第二十四号(一九五二年一月二十日)

* 257・音もなく雪降る広場青色のすべり台も大方は埋れるつ

258・夜更けて病院より汝の電話あり雪降る夜は淋しとの声

259・暗々と雪降る街を来し少女素早くウインドウに髪直しゆく

「アララギ」一九五二年一月号 其二 土屋文明選

260・丘に来て病みゐる汝を想ふ時何の樹か斷え間なく黄金の葉を降らす

「旭川アララギ月報」第二十五号(一九五二年二月十七日)

* 261・白々と睫毛凍らせ行く朝^{あした}ギヤラージの前ラヂエーターに湯を入れゐたり

262・BCG接種反対者中に精神科教授内村祐之ゐつこれ

も医師界のボスの一人

263・「難民」と訳われしは ディラレイト パーソンス displaced persons のこと「憩

ふ処なき民」と云へばあはれるなるに

* 264・「対日講和條約は二年内に原子戦を誘発す」ベヴァンの言を記憶しをかむ

* 265・抑圧の政治あればテロ生ずるは必然その必然を我は怖るに

「アララギ」一九五二年二月号 其二 土屋文明選

266・手術後を安けく睡る汝の部屋水色に塗りたる教會堂を見下してゐる

「旭川アララギ月報」第二十六号（一九五二年三月十六日）
または三〇日

267・組織なければ虚無主義に陥る日本青年層と分析されて一行の記事

268・悲しみを怒りに変へる術知らず庶民などと甘やかされて今を迎へき

* 269・終バスを襟立てて待つ鎧扉を降ろせしビルを吹く雪

の中

「アララギ」一九五二年三月号 其二 土屋文明選

270・截斷機に紙を仕掛ける秋雄君は中指のなき左手を器用に使ふ

「旭川アララギ月報」第二十七号（一九五二年四月二十日）
または二十四日

271・徴兵反対の掲示眺むる学生等サフランの鉢かばひ持つ一人あり

272・バーナーが青き焰を吹きていてフラスコは細かき泡を立て始めきつ

* 273・フラスコが沸騰すれば白衣のまま助教授君は茶を入れくるる

274・音もなく雪屋根並を照らす火事夜の病室の窓に見てゐつ

* 275・小泉信三の「平和論」援用し再軍備説なる此奴案の上会社重役なり

「旭川アララギ月報」第二十八号(一九五二年五月十八日)

* 276・中国の学生等今如何に学びをるらむか革命の口火切り成就したる今は

* 277・レミントン・タイプ打つ君のジヤケツ姿窓越して来る薄陽の中に

「アララギ」一九五二年五月号 其二 土屋文明選

278・BCG接種反對に専門外精神科教授内村祐之居つ此奴醫師界ボスの一人

279・悲しみを怒りに變へる術^{すべ}知らず庶民などと甘やかされて無爲の七年

「旭川アララギ月報」第二十九号(一九五二年六月十五日)

280・前脚を折りて食みゐる山羊の見ゆクローバー豊に揺るる堤防の上

* 281・部屋に君入り行きし氣配しばししてタイプのキイを打ち出だす音

282・富と權力が再び結びゆく過程ちつばけな日本なればパノラマの如し

「アララギ」一九五二年六月号 其二 土屋文明選

283・音もなく雪降る廣場青色に塗りたる滑り臺も大方は埋れつ

284・徴兵反對の揭示圍める學生等サフランの鉢をかばひ持つ一人あり

「旭川アララギ月報」第三〇号(一九五二年七月二十日)

285・ひとつそりとせし二階には嬰兒^{あな}るき眼覚めしままにかすかに笑ふ

* 286・札幌に汝を見舞ひし記念としインゼル版カロツサ詩集もとめ来たりつ

* 287・絶対安静ギプスに臥せる汝の溜息聞こゆれど睡りしさまを吾は続ける

「アララギ」一九五二年七月号 其二 土屋文明選

288・オー^{ママ}ホツクの流水輝くを見て來しと云ふ病みて十二年吾は海を見ず

「旭川アララギ月報」第三十一号(一九五二年八月十七日)

289・夜を灯しビルの廊下に漆喰を塗りゐし二人吾を見詰
めぬ

290・汗臭く我が腋にほふ午後にして果敢なく吾の何思ひ
ゐし

* 291・沈痛に卓をにぎりて語るさま既に聴衆の前に孤独な
りき

「アララギ」一九五二年八月号 其二 土屋文明選

292・富と権力が再び結びゆく過程ちつばけな日本なれば
ありありと見ゆ

「旭川アララギ月報」第三十二号（一九五二年九月二十一
日）

* 293・夜を灯し漆喰を塗り急ぐ五六人影絵の如くロビーに
見ゆる

* 294・きしきしとサドルの弾機ばねのしなひつつ薄荷草匂ふ原
を分け行く

* 295・灯を點し幻の如くに立てるビル流れる霧の白き視界
に

* 296・跪く頭上に響く祈りああ西村先生が祈つて下さる

「アララギ」一九五二年九月号 其二 土屋文明選

297・追風にペダル踏み易く歸る道散るアカシアの數限り
なし

「旭川アララギ月報」第三十三号（一九五二年十月十九日）

* 298・ペダル踏み柔らかき男声二重唱ボブラ並木路で吾を
抜きゆく

* 299・糸垂らし煉瓦積みゐし職人が櫓より唾をおとしきた
りぬ

* 300・狂人になりゆく前の手紙読むゴツホは弟にやさしか
りけり

* 301・頑に頤はりゆきて反戦ビラ撒かむとしつつ死にしジ
ヤツク・チボー

* 302・党員の君審かるる朝にして裁判所前三三度吾は行つ
てみる

「アララギ」一九五二年十月号 其二 土屋文明選

303・ギブスベッドの凹みはありありと汝が裸身乾しある
見れば心ゆらぎぬ

304・これから二年入るべき棺狀ギブス眼守る汝は今朝は
殊更に明るく話す

「旭川アララギ月報」第三十四号（一九五二年十一月十六
日）

305・バイブルを読まざるを責めて来たるかな窓に音たて
て霰降る今朝

306・きしきしとサドルの軋り吾が自転車萩の紅葉づる丘
降りゆく

* 307・奴隸の植民地国家といふことをいまいかもしれど認
めるよ僕も

「アララギ」一九五二年十一月号 其二 土屋文明選

308・急速に警官の思想が固定しゆくさま那須三造の歌は
示せり

「アララギ」一九五二年十二月号 其二 土屋文明選

309・跪く頭上近々と響く聲ああ今西村先生が祈つて下さ
る

「アララギ」一九五三年一月号 其一 土屋文明選

310・雑草の中より薄荷草匂ふ丘の上自転車横たへし時

「アララギ」一九五三年二月号 其一 土屋文明選

311・聖書をば読み合ひて寝に就かむとす明日吾は汝をベ
ッドに置きて去る

「アララギ」一九五三年七月号 其二 土屋文明選

312・廣底瓶コルベンに酸素氣泡の清き音麻酔の醒めし耳に聞こゆ
る

313・麻酔醒むれば吾を見守れる母の顔左の腕を撫さすり呉れ
ぬつ

「旭川アララギ月報」第三十七号（一九五三年八月十六日）

小原 耀 君に

314・鋭く清き音色立つるかな常臥しの瘦せたる君が振る

鈴のおと

* 315・枕元の小鈴を取りて振る君に高き窓より射す光あり

* 316・業々明けてジャム罐を添へ呉れしパン六年振りの君の横に食ふ

317・寿命などと弱気の言葉使ふ止めて小原君きみも胸郭成形手術受け給へよ

「アララギ」一九五三年八月号 其二 土屋文明選

318・手術二日目酸素に喰^おつて吾を見て牧師さん静かに祈り去る

「旭川アララギ月報」第三十八号（一九五三年九月二十日）

* 319・酸素をば喘ぎつつ吸ひ水を欲る吾が傍らに母と弟

320・剪除せし己が肋骨を貰ひ来し透きとほるやうに見ゆるもあはれ

321・喘ぎつつ酸素吸ひしも過ぎ去りて今日は砂囊を一つ減らしぬ

「アララギ」一九五三年九月号 其二 土屋文明選

322・茫々天地間に漂ふ實存と己れを思ふ手術せし夜は

「旭川アララギ月報」第三十九号（一九五三年十月十八日）

☆ 323・二重窓の外はおだしき雪ひかり手術のあとの輸血終りぬ

「アララギ」一九五三年十一月号 其二 土屋文明選

324・肋斷ちし胸の痺れて醒めしとき荒れたる庭の邯鄲のこゑ

「アララギ」一九五三年十二月号 其二 土屋文明選

★ 二重窓の外はおだしき雪光り手術のあとの輸血終りぬ

「アララギ」一九五四年一月号 其二 土屋文明選

325・日あたりに家鴨泳げる池の邊に赤塗りの自轉車ゆるめ配達夫来る

326・ストリップ劇観る事もなく病めれどもいつよりかバタフライといふ語も知れり

「アララギ」一九五四年二月号 其二 土屋文明選

327・一夜かかり母の白髪を染めし父朝より高校野球に伴
ひ行きぬ

「アララギ」一九五四年四月号 其二 土屋文明選

328・遺言の筆談終へて今は唯打ちたるモヒにしばし眠らむ

「アララギ」一九五四年五月号 其二 土屋文明選

329・部屋に置くクレゾール水の凍りゆく鋭き音を聞き
たりけり

「アララギ」一九五四年六月号 其二 土屋文明選

330・脂あぶらして二時間かかり痰を出す吾よりも辛さうに母
の見てゐつ

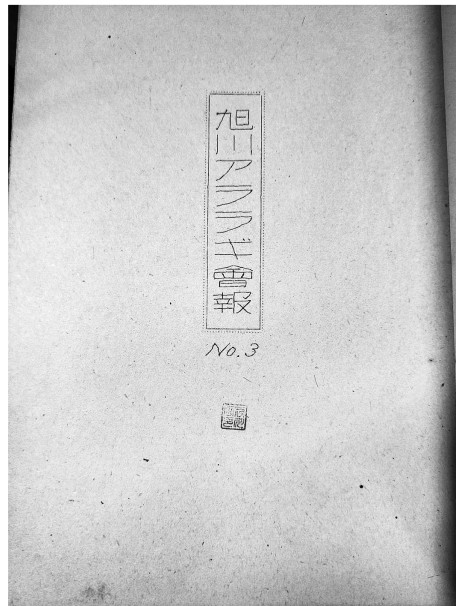
「アララギ」一九五四年七月号 其二 土屋文明選

331・汗の中に覺めたる吾に赤く染めし復活節の卵ときぬ
332・焚くことも稀になりたるストーブの上に谷地路の緑
を置きぬ

(二六)

【単行本未収録歌の図版の一部】

①「旭川アララギ会報」第三号（一九四九年十二月十八
日）表紙



②「旭川アララギ会報」第三号（一九四九年十二月十八日）前川正の短歌の一部

○ 前川 正

君の声受話器に聴きて吾は去る別離の時
と自ら決めて
受話器より決れ来し君の声想ひつつ雪ふ
きしきる街歩みゆくことをおのずから悲
君に告げず去りゆく
しむ如し雪降る街に
雪の吹く街を面伏せ歩みゆく君との別離
一人悲しみつつ
吹雪く街処女が面を伏せてゆく別離の電
話掛けて出でし時
トーストをコップにひたしたべておる君
なりあはれ病みつづけ居て (ク)

③「旭川アララギ月報」第三十二号（一九五二年九月二十一日）前川正の短歌

○ 旭川 前川 正

夜を灯し深喉を塗り急ぐ五人影絵の如くロビーに見ゆる
さしきしとサドルの弾橋のしなびつゝ花荷草匂ふ旅を分け行く
灯を熱し幻の如くに立てるビル流れる霧の白き視界に
踵く踵上に響く祈りああ西村先生が祈つて下さる

④「旭川アララギ月報」第三十二号（一九五二年九月二十一日）奥付

規 経

旭川アララギ月報会費は毎月短歌十首（特別の場合
は制限なし）を投稿出来る。文章等も自由。
原稿の取扱は編輯会議で決める。原稿は返戻せず。
締切は、前月二十五日。編輯者宛送附のこと。

一九五二・九・二一、発行 二五円
旭川市雪光町一区番外地 細谷弘治方
発行所
旭川市雪光町一区番外地 細谷弘治
発行所
旭川市雪光町一区番外地 細谷弘治
為替者 旭川市九條通十七丁目右五 前川 正
半年一五〇円 一年三〇〇円
(振替 旭川四二八九番 前川友吉)

旭川アララギ短歌会

46979~46988
三浦綾子記念文学館

注

(1) 三浦綾子の『道ありき（青春編）』に収録された短歌は、三浦（旧姓堀田）綾子のもので、のべ四十四首（うち、二首が二回登場）。前川正の短歌が十六首。北海道学芸大学（現、

北海道教育大学) 旭川分校教授であり、「アララギ」会員でもあった坂本富貴雄(「アララギ」では「坂本路夫」の筆名)の短歌が一首。ほか、「アララギ」会員の坂本兎美の短歌が一首。最終章の「五八」章に、三浦光世の短歌が三首引用されていた。計、のべ六十五首であった。

- (2) 「アララギ」に関しては、田中綾「三浦(堀田)綾子の短歌——『アララギ』土屋文明選歌の考察」(公益財団法人北海道文学館編『資料情報と研究2013』(北海道立文学館、二〇一四年三月)所収。)や、池田和利と田中綾の共著「資料紹介 三浦(堀田)綾子の『アララギ』掲載歌」(北海道大学人文学部「北海学園大学人文論集」第五七号(二〇一四年八月)所収)に詳述している。

- (3) 公益財団法人北海道文学館編 図録・作品集「北方文芸 2017」(北海道立文学館、二〇一七年七月)所収。

- (4) 樋口賢治(一九〇八—一九八三年)は、北海道滝川市生まれ。一九二八年に「アララギ」に入会し、土屋文明に師事。一九四五年から一九四八年まで日本出版協会札幌支部に勤務し、のち、光村教育図書常務となった。三宅奈緒子編『樋口賢治全歌集』(短歌新聞社、一九八九年)などがある。

- (5) 上出恵子『三浦綾子研究』(双文社出版、二〇〇一年)

所収。

- (6) 以下は、傍線部など一部明らかに表現が異なるため、同一歌とは見做さなかった。

「旭川アララギ会々報」第二号(奥付なし、一九四九年十月か)
119 この胸の空虚さは何の故ならむ枯枝が踏み折れて音立つるとき

「アララギ」一九四九年十二月号 其二 土屋文明選
139 この胸の空虚さは何の故ならむ枯枝が踏み折れて音をたてつつ

「旭川アララギ会報」第十一号(一九五〇年十二月三日)

* 187 排気管白く蒸気を噴ける角曲りて雪に眞向ひて行く

「アララギ」一九五一年三月号 其二 土屋文明選

205 排気管豊かに蒸気噴ける角曲りて雪に眞向ひて行く

「旭川アララギ会報」第十五号(一九五一年五月二十日)

206 共に病む吾らの試歩路ひつそりと測候所立つところを廻る

「アララギ」一九五一年五月号 其二 土屋文明選

218 共に病む吾らの試歩路ひつそりと測候所立つところに終る

「旭川アララギ月報」第二十一号(一九五一年十月二十一日)
246 改築の成りたる我等の教会堂今宵は二階まで灯れるが見

ゆ

「アララギ」一九五二年十二月号 其二 土屋文明選

256・改築の成りたる我等の教會堂今宵は明々と二階まで灯る

「旭川アララギ月報」第二十二号（一九五一年十一月二十八日）

249・丘に来て病みゐる汝を想ふ時何の樹か断間なく黄金に光る葉を降らせつつ

「アララギ」一九五二年一月号 其二 土屋文明選

260・丘に来て病みゐる汝を想ふ時何の樹か断え間なく黄金の葉を降らす

「旭川アララギ月報」第二十五号（一九五二年二月十七日）

262・BCG接種反对者中に精神科教授内村祐之ゐつこれも医師界のボスの一人

「アララギ」一九五二年五月号 其二 土屋文明選

278・BCG接種反对に専門外精神科教授内村祐之居つ此奴醫師界ボスの一人

「旭川アララギ月報」第二十六号（一九五二年三月十六日）

268・悲しみを怒りに變へる術知らず庶民などと甘やかされて今を迎へき

「アララギ」一九五二年五月号 其二 土屋文明選

279・悲しみを怒りに變へる術知らず庶民などと甘やかされて無爲の七年

「旭川アララギ月報」第二十七号（一九五二年四月二十日）また二十四日

271・徴兵反对の掲示眺むる学生等サフランの鉢かばひ持つ一人あり

「アララギ」一九五二年六月号 其二 土屋文明選

284・徴兵反对の掲示圍める學生等サフランの鉢をかばひ持つ一人あり

「旭川アララギ月報」第二十九号（一九五二年六月十五日）

282・富と權力が再び結びゆく過程ちつぽけな日本なればパノラマの如し

「アララギ」一九五二年八月号 其二 土屋文明選

292・富と權力が再び結びゆく過程ちつぽけな日本なればありありと見ゆ

（7）この一首のみ「札幌 前川正」の名義であり、ほかは「旭川 前川正」であった。

（8）この二首は「旭川 故前川正」の名義で掲載された。

なお、調査にあたっては、北海道立図書館北方資料室、北海学園大学附属図書館、北海道大学附属図書館、三浦綾子記念文学館にお世話になった。あらためて感謝申し上げる。

